

# 批判的ディスコース分析と認知言語学の接点

—認知メタファー理論のCDAへの応用<sup>1)</sup>—

鍋 島 弘治朗

(関西大学)

## 1. はじめに

本稿では、近年、文化研究の流れを受けて、談話研究のひとつの主流を形成するとともに、メディア・リテラシー教育などに対する貢献も著しい批判的ディスコース分析（以下、CDA）と、言語学の分野で1980年以降、Chomskyの理論に比肩する強力な言語哲学的背景を有した認知言語学との接点を、メタファーという観点から探る。一般に、CDAと認知言語学には共有する前提が少なくない。

本論の一方の車輪であるCDAは、1970年代から、1980年代に主にEast Anglia 大学のRoger Fowler, Tony Trew, Gunther Kress などによって行われた批判的言語学(Critical Linguistics:以下、CL)を、主に談話を対象として行う研究である。「批判的」とは「社会と政治の営みを社会構築のために実践的に結びつける」という意味である。CDAは、言語によるディスコースの中に表出する支配、差別、権力関係の指摘を目的とし、特に言語使用やディスコースの中に現れる不平等な社会的表現、構成、制度化を批判的に検討する。その射程には、大企業、政治、ジェンダー、メディアなどが含まれる。このグループの主要なテキスト分析手法は、Halliday (1978) などのFunctional Systemic Grammar (選択体系機能文法) から採用されている。

本論のもう一方の車輪である認知言語学は、文法を中心とした言語理論として一世を風靡したChomskyの生成的理論に対するアンチテーゼとして70年代から徐々に形成されてきた理論的言語学の枠組みである。認知言語学の主要な前提には 1. プロトタイプのカテゴリー観の採用 2. 統語の自律性の否定、3. 百科事典的語彙観、4. 意味論と語用論の区分の否定、5. Construal(世界構築)的言語観、6. 学際的な研究の推進、などがある。認知言語学は言語を単なる形式として取り扱わない点、および言語の意味を単なる客観世界内の指示対象あるいは真理値として扱わない点で生成理論など従来の言語学と異なる。

CDAと認知言語学には意外に共通点が多い。認知言語学の6つの特徴のう

ち、1から3は4と5の前提となる。4. 意味論と語用論の区分を否定することにより認知言語学は言語使用とディスコースに注目する。これは、CDAと共通の研究対象を保証する。また、5のConstrual(世界構築)的言語観は、まさにCDAの前提と同一である。すなわち、言語はある種の見方を反映しているものであり、そこには視点が不可欠であり、どの視点を取るかに関して個人や集団間での立場の相違が存在するという前提である。6. 学際的な研究の推進の点でもCDAと認知言語学は類似している。認知言語学は複数の手法を使用しながら認知と言語の関係を明らかにしていく試みであり、CDAも批判的哲学、古典的修辞法、テキスト言語学、社会言語学など複数の手法を用いて行われる学際的研究の立場である。また、van Dijkは認知科学そのものの手法も多く取り入れている。

一方、CDAと認知言語学には大きな相違もある。認知言語学が、「言語はどのようにあり、どのように使用されているのか（あるいは認知と言語の関係はどのようなものであるか）」という意味で記述的 (descriptive) な研究であるのに対し、CDAは、「言語はどのようにあるべきで、どのように使用されるべきなのか」という規範的 (prescriptive/normative) な研究である点である。これは研究のジャンルとして大きな相違となる。それでも、認知言語学と同様に記述的な研究であるFunctional Systemic Grammar (選択体系機能文法)がCDAに使用されていることを考えれば、CDAには言語分析の始点としてまず記述的な研究枠組みが必要であり、認知言語学を利用する余地も大いにあると言える。

本論の構成は以下のようなものである。導入部と両者の理論的枠組みを概説した当1節に続き、2節では、CDAと認知言語学のメタファー記述を概観する。3節では、CDAに関連したメタファーに関する記述例を取り上げ、認知言語学におけるメタファー理論が、CDAという枠組みを如何に豊かにできるか検討する。4節はまとめと結論である。

## 2. CDAと認知言語学におけるメタファー

本節では、CDAと認知言語学におけるメタファーに関する言及を取り上げる。まず、最初に本稿でいうメタファーを非公式に定義しておきたい。メタファーという用語は、様々な比喩、レトリック、言葉の彩、という意味で使用される広義の用法と、その中で、特に類似性に基づきたいわゆる隠喩を指す狭義の用法がある。本稿では後者の意味でメタファーを使用する(表1参照)<sup>2)</sup>。

本節の構成は以下の通りである。まず、2.1でCDAにおけるメタファーに対する言及を論じる。2.2では認知言語学におけるメタファーの定義や用語を示

す。2.3はまとめである。

Metaphor (比喩一般)	{	Metaphor (隠喩)	(人生という <u>旅路</u> で)
		Metonymy (換喩)	( <u>一升瓶</u> を飲み干す)
		Synecdoche (提喩)	(人は <u>パン</u> のみで生きるにあらず)
		⋮	

表 1 広義のメタファーと狭義のメタファー

## 2.1 CDAにおけるメタファーに関する言及

本小節では、まず、Halliday (1985)、Fairclough (1989, 1995a)、van Dijk (1998)、Charteris-Black (2004)を取り上げ、それぞれがメタファーをどのように取り扱っているかを確認することによってCDAにおける従来のメタファーの使用を概観する。

### 2.1.1 Halliday (1985)

Halliday (1985) は、メタファーを“A word is used for something resembling that which it usually refers to”と、類似性によるメタファーの基準を述べ、p. 319に(1)のような例文を挙げている。

- (1) a. A flood of protests poured in following the announcement.
- b. He oozes geniality.
- c. The government still hopes to stem the tide of inflation.

すなわち、抗議、愛想のよさ、インフレは液体ではないが、通常、液体に使用される *pour*, *ooze*, *tide*などの用語が使用され、あたかも液体であるかのように見なされている。別の箇所 (p. 328) では、“Here are some further examples to suggest something of the diversity of ideational metaphors.”と述べ、(2)のような例を挙げ、(b)は、(a)のメタファーであると述べている。しかし、(2)は(1)と大きく異なる種類であり、仮にこのような構文的変異をメタファーと呼ぶとすると(3)のような組もメタファーと呼ばざるを得なくなる。そこで、(2)、(3)はメタファーと考えず、(1)のような例のみをメタファーとする。

- (2) a. I haven't had the benefit of your experience.  
b. Unfortunately I haven't experienced as much as you.
- (3) a. The car ran over John.  
b. John was run over by the car.

### 2.1.2 Fairclough (1989, 1995a)

Fairclough (1989)は、CDAの手法のひとつとしてメタファーを挙げ、以下のように定義している。

Question 4: What metaphors are used?

Metaphor is a means of representing one aspect of experience in terms of another, ... (Fairclough, 1989, p.99)

さらに、Fairclough (1995a)では、Lakoff and Johnson (1980)を引用し、メタファーとは概念の問題であり単なる言葉の彩でないという主張に賛同している(メタファーの重要性に関しては、この他、p. 71, p. 201も参照)。

A further sphere of choice is metaphor (Lakoff and Johnson 1980). Contrary to common assumptions, metaphor is not just a literary device. Choice of metaphor may be a key factor in differentiating representations in any domain, literary or non-literary, including even scientific and technological. (Fairclough, 1995a, p.114)

### 2.1.3 van Dijk (1998)

van Dijkで、メタファーはメンタルモデルの操作に使用されるとし、否定的な価値の付加<sup>3)</sup>にメタファーが使われる可能性を示唆している。

The main function of such rhetorical structures and strategies is to manage the comprehension process of the recipient, and hence, indirectly the structures of mental models. A specific negative opinion may be emphasized by a catchy metaphor from a negative conceptual domain (for instance, describing outgroup members in terms of animals such as rats, dogs, bloodhounds, snakes, or cockroaches),... (van Dijk, 1998. p. 272)

#### 2.1.4 Charteris-Black (2004)

近年、談話分析と認知メタファー理論の両者を取り入れた研究も出始めており、そのひとつがCharteris-Black (2004)である。同書では、政治、メディア、宗教というジャンルでメタファーを批判的に取り上げている。例えば政治の分野で、光と火のメタファーとして、(4) を挙げている。

- (4) a. How far have we come in man's long pilgrimage from darkness toward light? Are we nearing the light? ? a day of freedom and of peace for all mankind? (Eisenhower)
- b. the glory of man's first sight of the world as God sees it, as a single sphere reflecting light in the darkness. As the Apollo astronauts flew over the moon's.... (Nixon)
- c. since the preservation of the sacred fire of liberty and the destiny of the republican model of government... (Washington)

Charteris-Black (2004) には優れた点と欠点の双方が存在する。まず、複数の興味深い分野からメタファー資料を集め、分野でまとめてみることで、歴史的な談話の継続性が見て取れる点が優れている。一方、欠点はメタファーの認定方法が恣意的な点である。例えば、(5) の用例の中の *shed blood* から、メトニミー BLOOD FOR LIFE とメタファー HARMING IS SEPARATING を導いている。

- (5) Witness said that it was only a miracle that prevent much more Jewish blood being shed because the first suicide bomb was aimed at a bus carrying Jewish nannies to a settlement inside the largely PLO-controlled Gaza Strip. (Times) Charteris-Black (2004, p. 26)

しかし、*shed*の古い意味が「切り開く」だからといって、そこから「傷つけることは切り開くことである」などというメタファーを導くことは、「階段から突き落とすと怪我をする」からといって、\*HARMING IS PUSHING SOMEONE DOWN THE STAIRSというメタファーを導こうとするのと同様、誤りであろう。

更なる問題点もある。第1に *shed* というひとつの単語だけからメタファーを立てていることが挙げられる。第2に、SEPARATE と HARMの間にあるのは、因果関係で、(構造的)類似性ではない。第3に推論が働いていない。すなわち、写像の概念が欠如している。通常、認知言語学では、メタファーであれば推論が働くことが述べられており、例えば、POLITICS IS WARというメタファーでは、宣戦布告、戦略、防御を固める、先制攻撃、持久戦、陣取り合戦、集中砲火というように様々な用語と様々な推論が戦争の領域から政治の領域に利用されている必要がある。

同様の誤りは、(6)にも見られる。Charteris-Black (2004)は、PURIFICATION IS FIREというメタファーを立てているが *sacred fire* という表現のどこから *purification* (浄化) がでてくるのか、その手順が全く明確ではない。

- (6) since the preservation of the sacred fire of liberty and the destiny of the republican model of government... (Washington)

概して、Fairclough, van Dijkなどはメタファーという概念を妥当な形で提示しているが、CDA理論全体としては、メタファーに関して必ずしも明確な定義や用法が確立されているとは言いがたい。そこで、次小節において認知言語学におけるメタファーの扱いを概説し、次節以降、認知言語学におけるメタファー理論がいかにCDAに取り入れられるか、事例を交えて検討したい。

## 2.2 認知メタファー理論

本小節では、認知言語学におけるメタファー理論の基本概念を確認する。認知言語学の枠組みのメタファー研究では、Metaphors are mappings across conceptual domains. (Lakoff, 1993: p.42)と述べられている。つまり、「メタファーとは概念領域間の写像である」と言われる。写像とは構造間の対応であり、構造とは、要素、要素同士の関係、関係同士の関係などの総体である。

具体例を取り上げよう。(7)に見るように、理論が建物のように語られる場合がある。

- (7) a. Is that the *foundation* for your theory?  
 b. The theory needs more *support*.  
 c. The argument is *shaky*.

- d. We need some more facts or the argument will *fall apart*.
- e. The argument *collapsed*.
- f. So far we have put together only the *framework* of the theory.

*foundation* (基礎)、*support* (支え)、*shaky* (揺れる)、*fall apart* (崩れる)、*collapse* (崩壊する)、*framework* (枠組み)などの建物の表現を理論に使用する例は日本語でも見ることができる。上述の定義との関連では、この場合の、「理論」と「建物」が領域となる。

「理論」の領域	←	「建物」の領域
理論の基本となる部分、前提的思考方	←	土台
理論の概要	←	骨組み
理論の説得力が失われる	←	崩れる

写像は語彙だけでなく、「推論」にも及んでいる。メタファー理論における推論とは、ある領域に関する知識である。人は建物に関して幅広い知識を有している。例えば、(8)のようなものである。

- (8) a. 土台がしっかりしていなければ、高い建物は建てられない
- b. 土台が崩れれば、全体が崩れるが、上層が壊れても土台が崩れるとは限らない
- c. 建物が揺れることは建物が崩れる危険性があることである
- d. 堅牢な建物は壊れにくい

また、2つの領域間には非対称性が見られる。すなわち、「建物」の用語や推論が「理論」の用語や推論として用いられるのであって、その逆ではない。この際の「建物」領域は「Source Domain (起点領域)」、「理論」領域は「Target Domain (目標領域)」と呼ばれている。今後、モト領域、サキ領域という用語も使用する。これに加えて、メタファーの重要な概念として、経験的基盤(動機づけ)があるが本稿では紙面の都合上割愛する。

### 2.3 まとめ

本節では、メタファーを中心に、CDAによる説明と認知言語学による説明を見た。2.1.1ではHalliday、2.1.2ではFairclough、2.1.3ではvan Dijk、2.1.4で

Charteris-Black のメタファー観を見ると共に、CDAでメタファーが重要な分析の道具となっていることを確認した。2.2では認知言語学におけるメタファー理論の概説を行った。次節では、CDA研究のメタファーに関する言及に認知言語学のメタファー理論の応用を試みた。以降の節では、写像を明示 (spell out: 以下、スペルアウトという用語も使用) したり、過去のメタファー研究に言及することにより、CDAにおけるメタファー分析をより豊かなものにする可能性を検討したい。

### 3. 認知メタファー理論のCDAへの応用

本節では、CDAにおいてメタファーを取り扱った具体例を取り上げ、これらに認知言語学的分析の適用を試みる。3.1では、Fairclough (1995)の麻薬密売人に対する戦争の考え方を、3.2では、van Dijk (1997)から英国は友人であるというメタファーを、3.3では、van Dijk (1998)から相対主義とアフリカ系人種の文化はウィルスであるというメタファーを取り上げる。

#### 3.1 Fairclough (1995, p. 69) “WAR ON DRUG PUSHERS”

Fairclough (1995)の麻薬取締に関する記事(特にSUN紙、p. 69を参照)では、戦争の用語が多用され、明らかに《麻薬取締は犯罪者との戦争である》というメタファーが見て取れる。この写像を以下に記述する(戦争領域の記述に関しては Lakoff and Johnson, 1980, p.80-1も参照)。

犯罪(麻薬)取締	←	戦争
麻薬密売人	←	敵
取締の強化	←	攻撃
英国民に麻薬を渡さない	←	防御
売人の駆逐	←	勝利
英国の麻薬汚染	←	敗北

このように写像を明示(スペルアウト)すると様々なことがわかる。ハイライトされる推論は、事態の緊急性、事態の重大性である。一方、隠蔽される要素も多い。麻薬とはいえ、売買は経済活動の一種であり、売り手だけでなく、買い手も存在するが、その買い手が隠蔽される。また、敵と味方に一括することによって、販売に関わる人々にも、非合法組織だけでなく、栽培者、輸送業者、国内業者、販売者、使用者など様々な人間が様々な関与の仕方をしていること



が隠蔽される。

写像を見ることでさらに、このメタファーと整合性がない奇妙な論理も浮かび上がる。例えば、本文中では、麻薬利益の没収が主張されているが、これは「自国民を守るための戦争」という本旨から微妙にずれている<sup>4)</sup>。また、同様に本文中「軍隊の使用も辞さない」ことが主張されているが、比喩として導入した「戦争」が実際の戦争にすり替えられるという奇妙な論理<sup>5)</sup>である。

Fairclough (1995)は 1. 情報源と書き手の区別のなさ、および 2. 伝達内容自体の表象が中心 (p. 61) であることをこの報道の特徴として挙げ、情報源に対するメディアの無批判な態度を批判的に分析している。SUN紙などでWARという用語が大見出しになっていること、MOBILIZE, SEIZEなどの用語が大文字の太字で強調されていることは、メディアが情報源と立場を同じくして報道していることを示し、さらに、そのメタファーを受容しさらに拡大している状況を示唆している点でFairclough (1995)の分析を裏付けている。

### 3.2 Fairclough and Wodak (1997, p. 268-71) “Margaret Thatcher Interview”

Fairclough and Wodak (1997)は、サッチャー首相(当時)のインタビューを再録しているが、その長い資料中の同首相の発言には、英国を擬人化(擬人化に関してはLakoff and Johnson, 1980, p. 33を参照)し、英国民や同盟国を友人と見立てるメタファーが見て取れる。

英国	←	人
同盟国	←	友人(allies)
英国民	←	友人(partnership)

ここでは、友人としての同盟国、パートナーとしての英国民などの表現から、国家が擬人化されていることがわかる。この擬人は強力である。国は人格や意図を持ち、健康状態、行為、信頼、友人関係などが関わるといふ推論を生むと共に、人間(自分)に対する推論が国家にそのまま利用できるというメタ推論を生む。一方、意図的と思われるが隠蔽されるものも重要である。実際には国家は制度であり痛みを感じることもないし、国家は強大な権力(予算、軍、法執行権)を持っていて、個人とはレベルが異なることも見えなくなる(Lakoff, 1996 のNation Is Family メタファーも参照のこと)。

このメタファーは*British as a younger person* (p.268)という表現にも表れている。Fairclough and Wodak (1997)は、国民の日常経験に訴える

Thatcherismというイデオロギーに対する注意を喚起しているが、擬人法の使用は、政治の寓話化というこの彼らの分析の傍証となる。

### 3.3 van Dijk (1998, p.279) “D’Souza on racism”

van Dijk (1998)は、D’Souzaにおける新右翼の保守的な論説を取り上げている。*virus* (ウイルス), *immune system* (免疫)、*breakdown* (衰弱)、*pathology* (病変)などの用語が使用されており、一貫して文化相対主義、さらにはアフリカ系の文化を病理と見なそうとする論調である。

相対主義 (／アフリカ系の (文化))	←	ウイルス
アフリカ系 (文化) の「モラルの低さ」	←	症例
文明／国家	←	人間
モラルの低下の拡がり	←	ウイルスの侵蝕
文明の崩壊／国家機能の停止	←	病気による衰弱

病気および医療に関しては複雑かつ精緻な知識構造が存在しその推論も豊富である (例えばLakoff, 1996におけるMorality Is Health; Immorality Is Diseaseのメタファーなどを参照)。推論として、ウイルスは身体を攻撃する、ウイルスの量がある臨界点を超えると身体を侵蝕する、予防治療が効果的である、などがある。さらに治療に関しては様々な推論が生じる。一方、隠蔽してしまうものも多い。アフリカ系人種は人間である、アフリカ系人種は既存文化を実際に「攻撃」しているわけではない、などである。

また、アフリカ系の人々をウイルスと喩えることは、別の意味での矮小化でもある。Lakoff and Turner (1989)は、the Great Chain of Being (大連鎖)メタファーを提唱している。大連鎖のメタファーとは、人間>動物>植物>無生物に重要性の階層を見いだす有生階層 (Animacy Hierarchy) の一種である。この大連鎖メタファーを想定すれば、生物としての階層の高い人間をより低いウイルスに見立てるこのメタファーは、アフリカ系人種を有生の階層上低いものとして捉えていることにもなる<sup>6)</sup>。

このようにウイルスに関する推論の写像を明示したり、大連鎖のメタファーなど認知言語学で知られる既存のメタファーを援用すれば、アフリカ系人種および多文化主義者を敵であり格下のものとしてみているというvan Dijk (1998)の主張は、より客観的に裏付けられよう。

### 3.4 まとめ

以上、本節では、CDAの分野における既存の研究に認知言語学のメタファー理論を応用した。認知メタファー理論の写像をスペルアウトすることにより、主張の一貫性、非論理性が浮き彫りになることがわかった。さらに、認知言語学におけるメタファーに関する過去の研究は、CDAでメタファーを理解する際に重要な意義を有することもわかった。次節では全体をまとめ、メタファー研究におけるCDAと認知言語学の位置づけを総括する。

### 4. 終わりに

ここまで、CDAに認知言語学のメタファー理論を組み入れる可能性を実例とともに検討してきた。1節では、両者の理論的枠組みを概説し、共通点を探った。2節では、CDAにおけるメタファー記述を概観するとともに、認知言語学のメタファー理論の概念と道具立てを確認した。3節では、CDA研究の中でメタファーに関する記述を取り上げ、認知言語学におけるメタファー理論が、CDAという枠組みを如何に豊かにできるかについて検討した。

認知メタファー理論はCDAに少なくとも三点で貢献できる。第1は、認知メタファー研究におけるメタファー概念の明晰性と道具立ての豊富さである。認知メタファー理論の定義を使用し、領域、写像、モト領域とサキ領域、推論などの概念を使用することにより、CDAにおけるメタファーの認定が明確になる。第2に、写像という形でメタファーをスペルアウトすることにより、導入している論理の一貫性が明らかになるとともに、論理的矛盾も明らかになる(麻薬取り締まりを戦争と見る例など)。第3に、認知メタファー理論のメタファーに関する研究の蓄積は、CDAで発見されたメタファーの意味合いの理解を助ける。また、認知メタファー理論の既存の研究を背景にして談話を眺めることにより、今までは気づかなかったメタファーを発見できる可能性がある。

一方、CDAから認知メタファー研究に対する示唆も少なくない。本稿の目的から外れるので詳細には触れないが、談話の中で写像が必ずしも一貫しないこと、主意(Central Mapping: Kövecses, 2002)や「隠れるもの」という視点の必要性、サキ領域からの逆推論の存在(Foconnier & Turner のBlending理論を支持)、価値評価を中心とし、詳細のない写像があること(鍋島, 2003aを支持)など興味深い現象が見いだされた。

誤解を恐れずに大雑把ないい方をすれば、言語の社会的、タイプのかつ静的な分析をするのが認知言語学のメタファー理論であるとするれば、CDAは、個人的、トークンのかつ動的な分析と言える。両者の理論的前提には共通点が多

く、両者は競合するというよりはむしろ補完的な役割を果たすであろう。今後、認知言語学のメタファー理論を応用したCDAが益々盛んになることが期待される。

- 注1 本稿は、日本時事英語学会第46回年次大会（2004. 10. 3 於成蹊大学）での口頭発表に基づくものである。当日、貴重なご質問やコメントをいただいた先生方、また、大変重要なご指摘、示唆をいただいた匿名の査読者の先生方に感謝を申し上げます。
- 注2 なお、隠喩、換喩、提喩などの種類と区分に関する詳細は佐藤(1978)、瀬戸(1986)などを参照。
- 注3 価値的類似性に関しては鍋島（2003a）を参照。
- 注4 取締りにおける単なる物品の「押収」であれば、ここから利益を得るという考え方を中心に置くのは奇妙である。査読者にご指摘いただいた通り、「没収」自体は敵軍の所有物を奪い取るという戦争の目的のひとつに合致するため、この推論はモト領域から発生したといえる。一方そうであれば、「自衛戦争」から「侵略戦争」へ微妙にズレが生じている感が否めない。
- 注5 査読者からご指摘があった「すり替え」をここでは「奇妙」と呼んでいる。
- 注6 ジェンダー問題で、平賀（1993）は《女性は商品である》《女性は食べ物である》を主張しているが、これも大連鎖のメタファーを使用すればその趣旨がさらに明確になる。

#### 主要参考文献

- 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 瀬戸賢一 1986. 『レトリックの宇宙』海鳴社
- 鍋島弘治朗 2001. 「『悪に手を染める』—比喩的に価値領域を形成する諸概念」『大阪大  
学言語文化学10』
- \_\_\_\_ 2002. 「政治を動かすメタファー」『言語』2002年7月号 大修館書店
- \_\_\_\_ 2003a. 「領域を結ぶのは何か—メタファー理論における価値的類似性と構造的類似  
性—」『Proceedings of the 3rd JCLA Annual Meeting』認知言語学会
- \_\_\_\_ 2003b. 「メタファーと意味の構造的性」『認知言語学論考 No.2』ひつじ書房
- 平賀正子 1993. 「品物としての女—メタファーにみられる女性観—」日本語学 Vol. 12  
明治書院
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
- Charteris-Black, Jonathan. 2004 *Corpus Approaches to Critical Metaphor Analysis*.  
London: Palgrave.
- Fairclough, N. 1989. *Language and Power*. London: Longman.
- \_\_\_\_ 1995a. *Critical Discourse Analysis: the Critical Study of Language*. London:  
Longman.
- \_\_\_\_ 1995b. *Media Discourse*. London: Arnold.
- Fairclough, N. and Wodak, R. 1997. Critical discourse analysis. In van Dijk, T.A ed.

- 1997 *Discourse as Structure and Process*. London: Sage Publications Inc.
- Halliday, M.A.K. 1978. *Language as Social Semiotic*. London: Arnold.
- \_\_\_\_\_. 1985. 1994. *Introduction to Functional Grammar*, first and second edns. London: Arnold.
- Kövecses, Zoltán. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1993. The contemporary theory of metaphor. In Ortony, A ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- van Dijk, T.A. 1998 *Ideology*. London: Sage Publications Inc.